

## 村境の神

著者	黒田 一充
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	62
ページ	2-5
発行年	2011-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00023904">http://hdl.handle.net/10112/00023904</a>

# 村境の神

黒田一充

奈良県明日香村の石舞台古墳から南へ吉野に続く道をたどると、飛鳥川に架かる橋にさしかかる。そこには川の上に綱が渡され、綱の中央には藁の作り物が吊されている（写真1）。ここが稲渕の集落の入口で、さらに南へ行った栢森の集落が近づいた場所にも同じような綱が掛かっている。現在はお綱掛けと呼ぶが、近世史料にはカンジョウナワと記されている。勧請縄

は、奈良県・三重県・大阪府から京都府・滋賀県・福井県若狭地方にかけての府県に多く見られ、おもに年のはじめに集落の入口、寺社の門前や鳥居に新しい綱が張られる。大きな綱には、細い綱や榊の枝、御幣などをその年の月数だけ付ける所も多い。滋賀県では、竹でつくったトリクグラスと呼ぶ輪しきみや榊の束を吊す集落もある（写真2）。



写真1 明日香村稲渕のお綱掛け



写真2 湖西市東寺の勧請縄



写真3 宮古島市平良西原のミーツキツナ

勧請縄と呼ばなくても、このような網を張る行事は、網掛けなどと呼ばれて全国的に見られる。いずれも、外界から悪いものが侵入するのを防ぐ装置である。写真3は、沖縄県の宮古島で厄払いの行事として村境に張るミーツキツナやミーピツナと呼ばれる網で、普段とは逆の左縄で編み、豚骨を吊している。

網ではなく、藁でもっと大きなものをつくる所もある。大きな草履や草鞋をつくる所が多く、村の外に住む大男が村にやってきては災厄をもたらすため、大きな履物を村境に吊すことでもっと大きな者が村に住んでいることを示して驚かせ、村に災厄を近づけなくするという伝承がともなっている所も多い。

愛媛県西部から高知県西部にかけての地域には、大草履を吊す地区が多く、オオヒト様の大草履とか、鬼の金剛草履と呼ばれる。特に九州へ大きく突き出した佐田岬半島に集中している。地元の愛媛県伊方町・町見郷土館の2003年の報告には、町内の10地区14か所を紹介していたが、実際は20地区ほどに現存するという。

写真4は、豊之浦地区の東端にあるもので、長さ140センチメートル、幅は60センチメートルの大草履以外に、御飯を入れた藁スポとトーバ（塔婆）を吊す。

各地でつくられる村境の履物の中には、大きいものとしては大正初期から始まった横浜市戸塚区の南谷戸の大草鞋で、約3.5メートルの長さがある。また、兵庫県豊岡市日高町田ノ口の



写真4 伊方町豊之浦の大草履



写真5 豊岡市日高町田ノ口の塞の神

ように、大草履と大草鞋の両方を吊す所もある（写真5）。

履物ではなく藁蛇をつくる所も多く、東京都清瀬市下宿の円通寺では、5月に疫神などの侵入を防ぐ「塞ぎの行事」が行われる。長さ約16メートルの大蛇をつくり、寺の西側の村境にある赤樫の樹2本の間には掛ける（写真6）。別に小さな藁蛇も旧村境14か所に取り付ける。

関東地方では、寺社で授与されたお札を割竹にはさんで村境に立てる所も多いが、千葉県市川市国府台では東西南北の境界の樹木にお札を





写真6 清瀬市下宿の藁蛇



写真7 川口市安行原の蛇造り



写真8 横手市大森町上溝字末野の鍾馗様

首に掛けた藁蛇を吊し、埼玉県川口市安行原あんぎょうはらでも口の中にお札を納めた藁蛇を村境に据える（写真7）。

東北地方では、藁の大人形をつくる所がある。18世紀前半に出羽を旅した菅江真澄は、『月の出羽路 仙北郡』に、「凡そその尺五六尺或は、七八尺に過さる也。杉の葉をもて蓬髪とし板に眼鼻画。藁にて造り、胸に牛頭天王の木札をさし、剣をもたせ、或は木刀をさ、せ、またつるぎさ、せたるあり」と記して「疫神祭草人形」のスケッチを残している。彼が描いた場所の大人形は現在なくなっているが、秋田県では東部の岩手県との県境に沿って、大人形を見ることができる。

横手市大森町上溝字末野では、集落の東を流れる上溝川の西岸に杉の大木があり、7月第1日曜日にそれを背にした鍾馗しょうと様の藁人形をつくる。高さ約4メートルで、墨で顔を描き、昆虫のような角を2本挿す（写真8）。各家でも、茅で鹿島様と呼ぶ小さな人形をつくる。背中に銭や餡餅を入れたツツコを負わせ、「賀勢鹿島大神」と記された幟を挿し、家の玄関の柱に括り付けておく。

鍾馗様に御神酒を供えた後、夕方から子供たちがリヤカーに鹿島舟を載せ、鹿島様の人形を集めて廻る。この舟は、木の骨組みに藁を覆った簡単なもので、帆柱に蠟燭を立てる。昔は、旧暦6月7日が鍾馗様づくりで、9日に鹿島送りが行われた。災厄とともに人形を載せた舟を川に流し、茨城県の鹿島神宮へ流れ着くよう祈ったが、現在は解体した前年の鍾馗様と一緒に燃やしている。横手市や南隣の湯沢市周辺には、横手市山内黒沢の約5メートルの鹿島様



や、湯沢市岩崎の約4メートルの鹿嶋様など、大人形がつくられる。

このような村境の大人形は、青森県・秋田県・岩手県のほか、福島県・新潟県・長野県北部に多く残っている。

福島県田村市船引町芦沢には、お人形様の行事がある。かつては5か所で行われていたが、現在は屋形・朴橋・堀越に残っている。大きな面に杉葉の髪、菰の胴体で薙刀を持ち、腰に刀を差す。高さは約4メートル、広げた両手は約6メートルになる(写真9)。

関東地方の大人形は、非常に数が少なくなっている。千葉県では、君津市大坂鴨畑や袖ヶ浦市阿部などで男女一對の等身大の藁人形を毎年9月につくり、団子を供える。鹿島人形と呼ばれ、大坂鴨畑では男はちょんまげ姿で刀を差して槍を持ち、女は髪を結って刀を差して薙刀を持つ(写真10)。阿部ではわざわざ手足の指を

1本少なくして、異形の者であることを示している。

茨城県では、銚田市畑田の玄生かまたや石岡市井関くろうで見ることができる。玄生の大杉様は、村はずれの杜の入口にあるクヌギの木に括り付けられた約2メートルの人形で、2月・5月・8月に杉葉の衣裳が新しくされる。

石岡市井関には、現代田・梶和崎・古酒・長者峰の4つの地区で、8月に大人形がつくられる。竹と杉葉を材料にし、一番大きい長者峰は約2.4メートルの高さがある。代田の大人形は、高さ約2メートル、横幅約1メートルで、右手に傘、左腰に刀を挿し、胸や臍などは俵でつくる(写真11)。井関では、この代田だけが市の指定文化財になっている。他の地区は、材料の入手や後継者の問題で指定を辞退されたと聞く。伝統行事を続けていくことの難しさがうかがえる。



写真9 田村市船引町芦沢字屋形のお人形様



写真10 君津市大坂鴨畑の鹿島人形



写真11 石岡市井関字代田の大人形

文学部教授